View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

千里金蘭大学紀要　12　61－68（2015）

〈原著論文〉

看護系大学生が行う看護研究の動向分析

Nursing Research Trend Analysis of Nursing Students in University

仲下　祐美子[1]，伊藤　朗子[2]，中本　明世[3]，平賀　元美[4]

要　旨

本研究の目的は、本学看護学部の学生が行った看護研究について経年の傾向および内容を明らかにすることにより、今後の教育への示唆を得ることである。研究対象は看護研究集録に集録されている１－４期生の研究計画書339編であり、研究テーマ、教員研究領域、研究計画書における研究背景の論述文字数、引用文献の種類および文献数を抽出し、分析した。その結果、学生の研究分野は全21分野と多岐に渡り、いずれの年度も「地域看護・公衆衛生看護」「母性看護・助産」「慢性看護」が多く、「高齢者看護」「小児看護」「がん看護」が続いた。研究分野ごとに研究対象には特徴がみられ、対象者への関わりやケアに対する「影響」や「効果」についての研究目的はいずれの研究分野でも共通していた。研究計画書は、研究背景の論述文字数が経年で増加傾向にあった。一方、引用文献やキーワードに関する記載不備は経年で増加傾向にあり、適切な研究計画書の作成への指導が必要である。

キーワード：看護研究，動向，研究計画書，看護学生，看護系大学
Nursing Research，Trend，Protocol of Nursing Research，
Nursing Student, College of Nursing

Ⅰ．はじめに

本学では看護学部の学生が行う研究の教育目標を「看護者として科学的な実践を行う上で、看護の事象を科学的に捉え、看護上の課題についての科学的な分析や看護実践の根拠について探求し、得られた知見を実践に活用できるための基礎的能力を養う」としている。教員は、学生の興味・関心、探求心に対して、看護に関連する研究論文のレビュー、研究計画の立案までの研究プロセスの実践、さらに学生の研究活動の進展に応じた研究計画の実施および論文作成の指導を行っている。学生時代に看護研究の一連の過程を理解・経験することは、臨床現場に出てからも継続した研究活動に取り組む糧となり、臨床現場でのリーダー的役割へ発展することが期待できる。よって、研究の指導にあたっては、学生の主体性や積極性を促し、学生自身が問題意識と研究目的の明確化ができるよう指導する必要があると考える。

看護学部の学生の研究に関する先行研究では、教員は学生の特徴や研究の進行度をコンスタントに把握し、研究プロセスから逸脱しないよう関わることの重要性や、教員がどの程度詳しく説明するかで学生の取り組み方が異なると述べられている[1)]。卒業研究論文の内容を分析した研究では、教員は専門領域以外の分野についても指導を行っており、学生の興味を優先させて学習意欲を継続させようとしていたことが報告されている[2)]。研究テーマの選択では、学生は自己の経験や身近な存在など自分に関連のあることをテーマとする傾向があり、広い視野の下でテーマを選択できるよう学生の関心を広げる指導の必要性が報告されていた[3)]。

本学の看護研究は卒業要件の必須科目であり、３年次12月に看護研究説明会を実施している。その後、学生には関心のある研究テーマを第３希望まで提出させ、それに基づいて３年次２月から３月にかけて

1　Yumiko NAKASHITA　千里金蘭大学　看護学部
2　Akiko ITO　千里金蘭大学　看護学部
3　Akiyo NAKAMOTO　千里金蘭大学　看護学部
4　Motomi HIRAGA　千里金蘭大学　看護学部

受理日：2015年10月15日
査読付

研究領域を調整し、約30名の教授、准教授、講師、助教の職位に応じた学生数を割り振り、指導している。概ね４年次４月頃から研究計画書の作成が開始となる。研究テーマや研究方法、個人研究あるいはグループ研究かについては学生が自由に選択し、教員の指導の下、研究計画書を作成することまでを必須とし、研究計画の実施と成果物としての論文作成は必須ではなく、学生の自由意思によるものとしている。これは、文献検討ののち実現可能性のある研究計画を立てることそのものが高度な能力を必要とすることから、本学の看護研究の教育目標達成において妥当としたところによるものである。なお、研究計画書の提出期限は４年次12月上旬としている。

本学看護学部では１－４期生が卒業しているが、学生指導は領域や教員に任されており、学生がどの様な興味・関心をもち研究計画書を立案もしくは論文作成を行っているか、その実態は報告されていない。そこで、本研究では本学看護学部の学生の研究テーマおよび研究計画書の論述文字数、引用文献などに着目し、看護研究の経年の傾向および内容を明らかにすることを目的とした。本研究により、看護研究に求められる今後の指導上の示唆を得ることができるとともに、本学の教育のさらなる充実に役立つと考えた。

Ⅱ．研究方法

１．研究対象

A大学看護学部看護学科の看護研究集録に集録されている１－４期生（研究実施年度2011－2014年度）の研究計画書とした。研究計画書数は2011年度78編、2012年度86編、2013年度97編、2014年度78編の計339編であった。

研究計画書は、研究テーマ（課題名）、キーワード、研究の動機と目的、研究背景、研究の意義、研究方法として研究デザイン、研究対象者、研究期間、データ収集方法、データ分析方法、倫理的配慮、最後に文献リストを記述したものである。これらの項目の記述は必須としており、枚数の制限はない。記述の注意事項は３点あり、研究背景は文献による根拠を示すこと、研究対象者は特性、選定方法、予定の人数などについて詳しく記述すること、文献リストは規定の記載様式に沿うことである。

２．データ収集期間および内容

データ収集は2015年６月－７月に、本学看護学部内にて行った。看護研究集録より抽出する内容は、研究実施年度、研究テーマ、教員研究領域、研究計画書における研究背景の論述文字数、引用文献の種類および文献数とした。引用文献の種類は、学会誌、商業誌、紀要、書籍（教科書を含む）、インターネット（官公庁、学会、協会）、抄録、その他とした。また、和文誌と欧文誌の総数を把握した。

３．分析方法

研究テーマは日本看護科学学会の演題分類の26分類[4]を参考にカテゴリを作成し、分類した。また、研究テーマは文字データとしてText Analysis for surveys 3.0を用いたテキストマイニング法による構文分析を行い、構成要素（語句）の頻度を集計した。品詞、助詞、助動詞は除外し、同義語や類義語は統一化を行った。構成要素は先行研究[2,5]を参考にし、研究対象（人・場所）、研究対象の状況に関する語、研究目的や手法に関する語、対象者の内面に関する語、援助形態に関する語に分類した。研究テーマのカテゴリおよび構成要素の分類は研究者３名で行った。また、構成要素の分類は、各研究分野の本学看護学部教員の助言を得て修正した。

研究計画書における研究背景の論述文字数、引用文献数は数量化データとして扱った。データの分析はFisher's exact testおよび一元配置分散分析を用いて検討した。分析にはIBM SPSS Statistics Version 20.0 for Windowsを用い、有意水準は５％とした。

４．倫理的配慮

看護研究集録からのデータ収集において、個人を特定する学籍番号、学生氏名、教員名のデータ収集は行っていない。抽出したデータはすべて集団として扱った。本研究は、A大学疫学研究倫理審査の承認を得て実施した（承認日2015年６月28日、承認通知番号208）。

Ⅲ．結果

１．学生の研究分野

研究実施年度および教員専門領域別にみた学生の研究分野を表１に示した。

研究実施年度別の学生の研究分野数は、2011年

表１　研究実施年度および教員専門領域別にみた学生の研究分野

項目		N	学生の研究分野																								
			看護管理	看護教育	看護情報	感染・リスクマネジメント	看護理論・歴史	看護技術	看護倫理	小児看護	母性看護・助産	高齢者看護	周手術看護	クリティカルケア	慢性看護	リハビリテーション看護	がん看護	緩和ケア	地域看護・公衆衛生看護	在宅看護	精神看護	家族看護	国際看護	災害看護	多職種連携	移植看護	外来看護	その他
研究実施年度	2011年度	78	0	1	0	4	0	1	0	2	15	6	4	0	7	0	3	0	16	5	7	0	4	1	0	0	0	2
	2012年度	86	0	1	0	3	0	5	0	5	13	9	3	0	7	2	9	3	11	4	7	1	1	0	1	1	0	0
	2013年度	97	3	3	0	0	0	7	2	10	10	10	5	1	11	0	6	2	15	7	4	0	1	0	0	0	0	0
	2014年度	78	0	7	0	0	0	3	0	8	10	4	2	0	9	0	6	2	13	4	4	0	4	0	1	1	0	0
教員専門領域	健康科学	25	0	1	0	7	0	1	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	基礎看護学	35	0	3	0	0	0	14	1	1	0	0	2	0	7	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
	成人看護学	60	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	11	1	18	2	19	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	精神看護学	32	2	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	4	0	21	0	0	0	0	0	0	0
	母性看護・助産学	49	0	2	0	0	0	0	0	0	46	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小児看護学	25	0	0	0	0	0	0	0	23	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	老年看護学	29	1	0	0	0	0	0	0	0	0	24	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
	公衆衛生・在宅看護学	84	0	1	0	0	0	0	1	0	1	1	0	0	6	0	3	0	38	20	0	1	10	1	1	0	0	0
計		339	3	12	0	7	0	16	2	25	48	29	14	1	34	2	24	7	55	20	22	1	10	1	2	2	0	2
（%）			(0.9%)	(3.5%)	(0.0%)	(2.1%)	(0.0%)	(4.7%)	(0.6%)	(7.4%)	(14.2%)	(8.6%)	(4.1%)	(0.3%)	(10.0%)	(0.6%)	(7.1%)	(2.1%)	(16.2%)	(5.9%)	(6.5%)	(0.3%)	(2.9%)	(0.3%)	(0.6%)	(0.6%)	(0.0%)	(0.6%)

度（１期生）15分野、2012年度（２期生）18分野、2013年度（３期性）16分野、2014年度（４期生）15分野であった。2011－2014年度全体でみると全21分野であり、「看護情報」、「看護理論・歴史」、「外来看護」は０編であった。

研究分野は、2011年度（１期生）では「地域看護・公衆衛生看護」が16編（20.5%）で最も多く、次いで「母性看護・助産」15 編（19.2%）、「慢性看護」と「精神看護」がいずれも７編（9.0%）であった。2012年度（２期生）では、「母性看護・助産」13編（15.1%）、「地域看護・公衆衛生看護」11編（12.8%）、「高齢者看護」と「がん看護」がいずれも９編（10.5%）であり、2013年度（３期生）では「地域看護・公衆衛生看護」15編（15.5%）、「慢性看護」11 編（11.3%）、「小児看護」・「母性看護・助産」・「高齢者看護」の分野がいずれも10編（10.3%）、2014年度（４期生）では「地域看護・公衆衛生看護」13編（16.7%）、「母性看護・助産」10編（12.8%）、「慢性看護」９編（11.5%）の順に多かった。

教員専門領域別の学生の研究分野を2011－2014年度全体でみると、教員の専門領域に特化した分野にとどまらず、複数の他分野の研究指導を行っていた。

２．研究計画書の精度

研究計画書の精度を測るため不備の有無および不備の内容を表２に示した。

研究計画書の不備なしは2011年度（１期性）71編（91.0%）、2012年度（２期生）69編（80.2%）、2013年度（３期性）65編（67.0%）、2014年度（４期生）48編（61.5%）であった（P＜0.001）。

不備の内容は文献記載に不備ありが最も多く、次いでキーワードの記載なしであり、文献記載不備とキーワードの記載なしの両者がみられたものもあった。

表２　研究計画書の精度

	N	不備なし		文献記載に不備あり		キーワードの記載なし		文献記載不備およびキーワード記載なし	
2011年度	78	71	(91.0%)	6	(7.7%)	1	(1.3%)	0	(0.0%)
2012年度	86	69	(80.2%)	13	(15.1%)	3	(3.5%)	1	(1.2%)
2013年度	97	65	(67.0%)	27	(27.8%)	5	(5.2%)	0	(0.0%)
2014年度	78	48	(61.5%)	27	(34.6%)	0	(0.0%)	3	(3.8%)
計（%）	339	253	(74.6%)	73	(21.5%)	9	(2.7%)	4	(1.2%)

Fisher's exact test P<0.001

３．研究背景論述文字数および引用文献

研究計画書の研究背景の論述文字数および引用文献数を表３に示した。分析対象は前述した研究計画書に不備なしの計253編とした。

研究背景の論述文字数は、2011年度（１期性）1307.3±1189.6、2012年度（２期生）1670.9±1066.9、2012年度（３期性）1658.5±1382.7、2013年度（４期生）2239.6±1656.8であった（P＜0.005）。

研究計画書での引用文献数の平均は2011－2014年度全体で8.8－11.0、海外文献数は0.0－0.3、研究背

表３　研究計画書の研究背景論述文字数および引用文献数

項目	年度	平均値	標準偏差	最小値	最大値	中央値	P値[1]	多重比較[2]
研究背景の論述文字数	2011年度	1307.3	1189.6	239	5536	841	＜0.005	2011年度＜2014年度**
	2012年度	1670.9	1066.9	260	5219	1413		
	2013年度	1658.5	1382.7	257	6979	1356		
	2014年度	2239.6	1656.8	497	6982	1555		
研究計画書の引用文献総数	2011年度	8.8	7.1	1	37	8	0.192	
	2012年度	11.0	6.3	2	30	10		
	2013年度	10.0	6.6	2	38	9		
	2014年度	11.0	5.7	3	29	10		
研究計画書の海外文献数	2011年度	0.3	1.0	0	6	0	0.099	
	2012年度	0.2	0.7	0	4	0		
	2013年度	0.0	0.1	0	1	0		
	2014年度	0.1	0.5	0	3	0		
研究背景での引用文献数	2011年度	6.0	4.7	1	28	5	0.244	
	2012年度	7.1	4.4	1	20	6		
	2013年度	7.1	5.5	1	33	6		
	2014年度	7.9	4.9	1	22	7		
研究背景での学会誌引用数	2011年度	1.7	2.4	0	13	1	0.010	2011年度＜2012年度*
	2012年度	3.2	3.1	0	12	3		2011年度＜2013年度*
	2013年度	3.3	3.6	0	21	3		
	2014年度	3.0	3.2	0	19	2		
研究背景での商業誌引用数	2011年度	3.3	3.6	0	15	2	＜0.001	2011年度＞2013年度**
	2012年度	3.1	3.0	0	14	2		2012年度＞2013年度*
	2013年度	1.5	1.6	0	6	1		2013年度＜2014年度**
	2014年度	3.3	2.9	0	15	3		
研究背景での紀要引用数	2011年度	1.1	1.6	0	7	1	0.006	2012年度＜2013年度**
	2012年度	1.0	1.5	0	7	1		
	2013年度	2.0	2.4	0	13	1		
	2014年度	1.1	1.4	0	5	1		
研究背景での書籍引用数	2011年度	0.6	1.0	0	4	0	＜0.005	2011年度＜2013年度**
	2012年度	1.2	1.6	0	8	1		
	2013年度	1.7	2.4	0	12	1		
	2014年度	1.2	1.8	0	7	0		
研究背景でのインターネット引用数	2011年度	0.9	1.5	0	5	0	0.412	
	2012年度	0.9	1.6	0	7	0		
	2013年度	1.1	2.0	0	9	0		
	2014年度	1.4	1.7	0	7	1		
研究背景での抄録引用数	2011年度	0.7	1.6	0	7	0	0.002	2012年度＞2013年度**
	2012年度	1.0	1.5	0	6	0		
	2013年度	0.1	0.6	0	3	0		
	2014年度	0.4	1.2	0	6	0		
研究背景でのその他の引用数	2011年度	0.5	1.1	0	4	0	0.158	
	2012年度	0.6	1.8	0	10	0		
	2013年度	0.1	0.5	0	3	0		
	2014年度	0.5	1.3	0	7	0		

N＝253（2011年度N＝71、2012年度N＝69、2013年度N＝65、2014年度N＝48）
[1] 一元配置分散分析　[2] Tukey HSD *P<0.05、**P<0.01

景での引用文献数は6.0－7.9であった（いずれも有意差なし、以下n.s.とする）。研究背景での引用文献を種類別にみると、学会誌1.7－3.3（P＝0.010）、商業誌1.5－3.3（P＜0.001）、紀要1.0－2.0（P＝0.006）、書籍0.6－1.7（P＜0.005）、インターネット0.9－1.4（n.s.）、抄録0.1－1.0（P＝0.002）、その他0.1－0.6（n.s.）であった。その他とは、官公庁、学会、協会以外のwebサイトや研究報告書であった。

４．研究テーマの構成要素と構成要素数

研究テーマの構成要素と構成要素数を表４に示した。分析対象は2011－2014年度全体で学生の研究分野が１割以上を占めるものとしたところ「地域看護・公衆衛生看護」55編（16.2%）、「母性看護・助産」48 編（14.2%）、「慢性看護」34編（10.0%）であった。

研究対象（人・場所）と研究対象の状況に関する語を研究分野別に構成要素数が多い順にみると、地域看護・公衆衛生看護では、研究対象（人・場所）は「高齢者」10、「母親」４、「父親」３であり、次に「親」「女性」「きょうだい」等がそれぞれ２であった。研究対象の状況に関する語では「運動習慣」８、「在宅介護」「老老介護」「生活習慣病」等がそれぞれ２であった。母性看護・助産では、研究対象は「母親」10、「助産師」９、「妊婦」８、「初産婦」６であり、状況は「妊娠期」11、「出産」４、「愛着形成」「分娩」がそれぞれ３であった。慢性看護では、研究対象は「患者」８、「糖尿病患者」４、「パーキンソン病患者」３であり、状況は「ニーズ」３、「セルフケア」「退院」「ターミナル期」等がそれぞれ２であった。

研究目的や手法に関する語は、いずれの研究分野でも「影響」「効果」「検討」等の構成要素数が多く、慢性看護では「文献」が最も多かった。「実態調査」「インタビュー調査」「意識調査」「アンケート」等の調査方法に関する語も挙がっていた。

対象者の内面に関する語は、「心理」「思い」がいずれの研究分野でも出現していた。援助形態に関する語では、地域看護・公衆衛生看護では「体験型ゲームスポーツ」11、「支援」８、「地域高齢者スポーツ推進活動」「健康教育」「介護予防教室」等であった。母性看護・助産では「母乳育児」４、「性教育」３、「関わり方」「ケア」等が２であり、慢性看護では「看護」「音楽療法」「食事療法」がそれぞれ２であった。

Ⅳ．考察

１．看護研究の経年の傾向について

学生が行った研究分野は全21分野であり、学生の興味・関心は多岐に渡ることが示された。研究分野は、研究実施年度別に編数の増減にばらつきがみられたものの、各年度の上位は「地域看護・公衆衛生看護」「母性看護・助産」「慢性看護」であり、「高齢者看護」「小児看護」「がん看護」が続いた。上位を占めた研究分野は、10年間分の卒業研究論文の内容分析を行った先行研究[2,5]と同様であり、本学特有の傾向ではないといえる。

研究テーマの検討および決定は、学生と教員の議論によって行うが、いずれの教員も専門領域外の研究分野を指導しており、教員主体ではなく、学生の興味・関心を優先していることが伺えた。しかし、学生はどのような研究テーマとするか模索する段階から教員の関わりを求めており[6]、研究テーマの決定には教員の示唆による影響は否めないとの報告がある[7]。学生が長期間、意欲を失わず研究に取り組むためには、学生が目的をもち、興味・関心をもつことが課題探求の上で重要であるが、研究に関連する不安や自信のなさは学生が主体的に取り組む妨げとなる[8]。教員は、学生の意思や体験を引き出し、研究の見通しが立てられるよう指導することが必要と考える。

研究計画書について、本学では雛型となる様式はあるが、使用を義務付けてはいない。看護研究集録に集録されている研究計画書は40字×35行（１ページあたり1400 字）を設定し、論述している学生が多かった。この様式に研究背景の論述文字数をあてはめると、2011年度（１期生）では約１ページ、2014年度（４期生）では約1.6ページに相当する。研究背景での引用文献は、年度により傾向の違いはみられるが、概ね、学会誌２～３件、商業誌２～３件、紀要１件、書籍１件、インターネット１件、抄録０～１件が用いられていた。しかし、引用文献の種類別の最小値はいずれの年度も０であることから、前述した概観はあくまで平均であり、学生によって偏りがあることが分かる。研究テーマによっては、該当する研究の文献数が多くはない場合もあると考えられるが、文献検索が不十分もしくは不適切であったことが推測される。本学では研究計画書作成にあたり、付属図書館で医学中央雑誌をはじめとした文献検索データベースの使い方のガイダンスを実施し

表４　研究分野上位3位の研究テーマの構成要素と構成要素数

研究分野	研究対象（人・場所）		研究対象の状況に関する語		研究目的や手法に関する語		対象者の内面に関する語		援助形態に関する語		その他	
地域看護・公衆衛生看護（N＝55）	高齢者	10	運動習慣	8	影響	6	心理	1	体験型ゲームスポーツ	11	役割	3
	母親	4	在宅介護	2	効果	5	精神面	1	支援	8	作成	1
	父親	3	老老介護	2	検討	3	思い	1	地域高齢者スポーツ推進活動	2	軽減	1
	親	2	生活習慣病	2	実態	3	負担感	1	健康教育	2	利用	1
	女性	2	食生活	2	必要性	2	自覚	1	介護予防教室	2	促進	1
	子ども	2	症状別	1	変化	2	やる気	1	健康増進運動プログラム	2	推進	1
	きょうだい	2	出産	1	課題	2			健康指導教材	2	継続	1
	児童	2	妊娠	1	要因	2			高齢者引きこもり防止	1	対応	1
	地域	2	子育て	1	現状	2			健康増進活動	1	会話	1
	看護学生	2	育児不安	1	実施	2			交流	1	活動	1
	産業保健師	2	先天性心疾患	1	獲得	2			運動指導	1		
	養護教諭	2	糖尿病	1	研究	2			体操	1		
	看護師	2	高血圧	1	有用性	1			喫煙防止教育	1		
	保健室登校	1	ダウン症	1	構造	1			性教育	1		
	ひきこもり	1	結核	1	プロセス	1			保健医療ケア	1		
	相談者	1	ノロウイルス	1	比較	1			レスパイトケア	1		
	学童期	1	病気	1	関連性	1			服薬管理	1		
	中高生	1	障害	1	アプローチ方法	1			服薬支援	1		
	女子大生	1	要介護度	1	考察	1			禁煙支援	1		
	若年層	1	誤嚥予防行動	1	実態調査	1			職場復帰支援	1		
	若年女性	1	子宮頸がん検診受診行動	1					保健福祉サービス活用	1		
	20歳代	1	やせ	1					保健サービス	1		
	夫	1	集団感染	1					音楽	1		
	配偶者	1	喫煙	1					飼育	1		
	父母双方	1	禁煙	1								
	介護者	1	QOL	1								
	家族介護者	1	欲求段階	1								
	男性営業マン	1	ニーズ	1								
	就労女性	1	疲労	1								
	女性事務職者	1	ストレス	1								
	大型トラック運転者	1	就学生活	1								
	単身赴任者	1	地域生活継続	1								
	小学校教諭	1	労働	1								
	中学校教員	1										
	男性養護教諭	1										
	専門職	1										
	認知症高齢者	1										
	認知症患者	1										
	統合失調症患者	1										
	メンタルヘルス不調者	1										
	ALS患者	1										
	重症心身障害児	1										
	小学校	1										
	中小企業	1										
	地域包括支援センター	1										
	相談機関	1										
	組織	1										
	動物	1										
母性看護・助産（N＝48）	母親	10	妊娠期	11	検討	4	心理	4	母乳育児	4	役割	4
	助産師	9	出産	4	影響	4	認識	3	性教育	3	理解	1
	妊婦	8	愛着形成	3	要因	3	思い	3	関わり方	2	形成	1
	初産婦	6	分娩	3	効果	3	意識	3	ケア	2	軽減	1
	経産婦	4	産後	2	研究	3	受容	2	援助	2	問題点	1
	女性	4	精神疾患	2	比較	2	母性意識	1	支援	2	姿勢	1
	助産院	4	胎児期	1	理由	2			助産ケア	2	年齢別	1
	父親	3	胎動	1	変化	2			カンガルーケア	1		
	10代	3	37週	1	現状	2			ベビーマッサージ	1		
	夫	3	正期産前期破水	1	過程	2			育児	1		
	妻	2	陣痛発来	1	関連性	1			育児環境	1		
	児	2	心拍数	1	違い	1			マタニティスポーツ	1		
	妊産褥婦	1	子宮口開大状況	1	実態	1			介入プログラム	1		
	新生児	1	帝王切開術	1	内容	1			性教育プログラム	1		
	家族	1	分娩所要時間	1	検証	1			アプローチ	1		
	ステップファミリー	1	出産体験	1	解明	1			サポート	1		
	一般大学生	1	授乳中	1	考察	1			食事指導	1		
	高校生	1	乳房トラブル	1	有効性	1			音楽療法	1		
	中学生	1	母乳拒否	1	インタビュー調査	1			鎮静	1		
	男性	1	啼泣	1	意識調査	1			情報提供	1		
	看護師	1	妊娠先行婚	1	実態調査	1			社会資源	1		
	看護職	1	次子出産	1	アンケート	1			交換ノート	1		
	病院	1	先行分娩から6年経過	1								
	出産施設	1	周産期DV	1								
	NICU	1	流産	1								
			胎児異常	1								
			母体搬送事例	1								
			育児不安	1								
			産後うつ病	1								
			ストレス	1								
			喫煙習慣	1								
			禁煙継続	1								
			月経随伴症状	1								
慢性看護（N＝34）	患者	8	ニーズ	3	文献	11	心理	4	看護	2	役割	3
	糖尿病患者	4	セルフケア	2	研究	7	思い	2	音楽療法	2	実施状況	1
	パーキンソン病患者	3	退院	2	検討	3	充足度	1	食事療法	2	向上	1
	ALS療養者	2	ターミナル期	2	プロセス	2			退院指導	1	困難	1
	家族	2	死の受容過程	2	方法	2			退院調整	1	要件	1
	看護師	2	慢性閉塞性肺疾患	2	効果	2			在宅療法	1	年齢	1
	成人糖尿病患者	1	慢性疾患	1	焦点	2			人工呼吸器	1	性別	1
	透析導入患者	1	慢性腎不全	1	視点	1			呼吸困難マネジメント	1		
	神経難病患者	1	アトピー性皮膚炎	1	レビュー	1			嚥下リハビリテーション	1		
	慢性呼吸不全患者	1	ネフローゼ症候群	1	違い	1			転倒予防	1		
	心疾患患者	1	HIV	1	要因	1			ケア	1		
	白血病患者	1	慢性的	1	要素	1			支援	1		
	HIV陽性患者	1	急性期	1	関連	1			足浴	1		
	結核患者	1	呼吸困難	1	関係	1			手浴	1		
	不眠症患者	1	痛み	1	影響	1			音楽聴取	1		
	男性	1	不安	1	有効性	1			ストレス軽減	1		
	医療者	1	浮腫	1	有用性	1			教育	1		
	病棟看護師	1	健康障害	1	分析	1			関わり方	1		
	AIDS専従看護師	1	呼吸器系	1	考察	1			チームアプローチ	1		
	病院	1	嚥下機能	1	実態	1						
	日本	1	摂食	1	解決	1						
	職場	1	運動	1	反応	1						
			睡眠	1								
			QOL	1								
			ライフスタイル	1								
			自己管理	1								
			エンパワメント形成	1								
			無菌室入室中	1								
			センサーマット使用中	1								
			日内変動	1								
			キャリーオーバー	1								
			仕事	1								

ている。ガイダンスは学生個人もしくは教員のゼミ単位でも申し込むことができる。研究計画書作成前だけでなく、研究テーマを検討および決定する過程においても、必要十分な文献検索ができるよう、検索手順の確認やキーワードの選定などへの指導の必要性が示唆された。

また、研究計画書に関しては、引用文献やキーワードに関して記載に不備があるものがみられた。その上、不備の編数は経年で増加傾向にあり、定められた方法を遵守する認識や研究計画書作成へのレディネスの低下が推測された。一方、教員の指導不足という側面もあると考えられ、学生と教員の双方が規定を再認識する必要があると考える。学会誌などへ論文投稿する際には、投稿規定と併せてチェックリストが設けられており、リストに沿って原稿を確認する手順がある[4)]。投稿論文は規定に従っていなければ受領されない場合があり、論文のみならず研究計画書においても、規定に則り適切に作成することが不可欠である。先行研究では不備に関して、卒業研究論文での研究対象数や分析方法などの研究方法の記載不備や、図表の不適切な用い方があったことが報告されていた[2,5)]。本学では研究計画書の研究対象者に関する記述において、特性や選定方法、予定人数などを詳細に明記することとしている。これらは研究を遂行するうえで重要な項目であり、教員には研究遂行能力を高める指導が求められると考える。

２．看護研究の内容について

研究分野別に研究対象みると、地域看護・公衆衛生看護では「高齢者」「母親」「父親」「子ども」、母性看護・助産では「母親（妊婦、産婦）」「助産師」、慢性看護では「患者」を中心に関心の広がりがみられ、研究分野ごとの特徴がでていると考えられた。対象者への関わりやケアに対する「影響」や「効果」について、対象者自身の「心理」や「思い」については、いずれの研究分野でも採り上げていた。本研究では、学生の研究動機を把握していないが、先行研究では、学生は臨地実習という看護実践の体験から、患者との関わりや対象理解についての気づき、そこから派生する看護のあり方について問題提起し、研究へ着手する動機付けになっていたことが報告されている[9)]。本研究では、看護情報、看護理論・歴史、外来看護の研究分野はいずれの年度も０編であったことから、体験する機会の少ないものは研究の視点には挙がらないことが推測された。

研究目的や手法に関する語では、「実態調査」「インタビュー調査」「意識調査」「アンケート」「文献」などの調査方法が挙がっていた。本文内では結果を示していないが、１－４期生の看護研究集録には全53編（15.6%）の論文が集録されており、その調査方法は文献検討28編（52.8%）、インタビュー調査12編（22.6%）、介入研究９編（17.0%）、質問紙調査と実験研究がそれぞれ２編（3.8%）であった。論文作成数をみると、経年で減少傾向にあった。近年は、個人情報保護などにより調査の受入れが難しくなりつつあることや[10)]、倫理的責任を意識するあまりデータが収集できにくく、意味のある研究の遂行が困難となることが危惧されている[11)]。本学看護学部では、研究計画書の作成を必須とし、論文作成は学生の自由意思によるものとしている。よって、研究計画書の作成のみの場合、研究対象者や場所、調査方法の設定は学生の自由な発想を基に、実現可能性の高い方法を検討できるよう教員は指導している。研究計画書の作成においては、すべての学生が、どのように対象者を選択し、どのように同意を得て研究を実施するか、そのために必要な手順や方法を検討できるよう指導する必要があると考える。さらに、看護研究の目的には、研究活動を通して自己の看護観を深めるという側面がある[12)]。学生が主体的な研究態度を身につけ、思考能力を鍛えられるような関わりも必要と考える。

３．研究の限界と今後の課題

本研究は、看護研究集録に集録されている１－４期生のデータを看護学部全体のデータとして扱い、看護研究の経年の傾向および内容を明らかにした。しかし、先行研究では専門研究分野単位で学生の研究について報告しているものが散見され、学生の研究への興味・関心の変遷が詳細に示されている[3,7,9,10)]。今後、分析対象数を増やした検討を行うことで、看護学部全体の研究および専門研究分野別の研究テーマの経年の傾向が捉えられると考える。

また、本研究は研究計画書を用いた動向分析であり、研究論文での分析ではない。よって、研究対象者や対象数、調査方法についてはデータ抽出しておらず、先行研究[2,5,7,9)]で行われていた研究方法の妥当性の検討や研究上での統計技術などの評価も行っていない。さらに、研究に求められる教育の質という観点では、学生側の視点を含めた評価が必要であ

り、今後の課題と考える。

Ⅴ．結論

１－４期生の看護研究の研究分野は全21分野であり、学生の興味・関心は多岐に渡ることが示された。研究分野はいずれの年度も「地域看護・公衆衛生看護」「母性看護・助産」「慢性看護」が多く、「高齢者看護」「小児看護」「がん看護」が続いた。研究分野ごとに研究対象には特徴がみられ、対象者への関わりやケアに対する「影響」や「効果」についての研究目的はいずれの研究分野でも共通していた。研究計画書においては、研究背景の論述文字数は経年で増加傾向にあるものの、引用文献やキーワードに関する記載不備が増加傾向にあり、適切な研究計画書の作成への指導が必要である。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力くださいました卒業生の皆様に感謝申し上げます。また、本研究の分析にあたり、ご助言賜りました本学看護学部教員の皆様に深く御礼申し上げます。

文献

１）三上聖治，加賀谷唯，長谷川菜希，三上紗葵，森田菜月，山本茉奈美，看護学部学生の卒業研究の実態とアプローチの問題点，弘前学院大学看護紀要，10,47～51（2015）
２）津本優子，佐藤美紀子，竹田裕子，井上和子，吉野拓未，小林裕太，看護学生の卒業研究論文の実態調査－６－10期生の研究内容分析－，島根大学医学部紀要，36,１～12（2013）
３）山縣由子，掛屋純子，木下香織，古城幸子，生活習慣病に視点をあてたA短期大学看護学科卒業研究の動向分析，新見公立短期大学紀要，29,95～102（2008）
４）公益社団法人 日本看護科学学会，http://jans.umin.ac.jp/
５）津本優子，福間美紀，小林裕太，看護学生の卒業研究論文の実態調査－過去５年間の研究内容分析－，島根大学医学部紀要，30,23～33（2007）
６）中村郷子，古瀬みどり，看護系大学学生の卒業研究における課題探求プロセス，日本看護研究学会雑誌，30（１），89～95（2007）
７）遠藤明美，谷田恵美子，齋藤智恵，滝本茂子，松島眞己，卒業研究からみる老年看護に関する研究の動向と看護大学生の関心，岡山県看護教育研究会誌，37（１），25～31（2013）
８）内海香子，水野照美，山本洋子，村上礼子，清水玲子，棚橋美紀，中村美鈴，看護系A大学成人看護学領域での学生の卒業研究における困難と学び，日本看護学教育学会誌，19（１），71～78（2009）
９）掛屋純子，木下香織，山縣由子，古城幸子，A短期大学看護学科における卒業研究の動向－がん看護に視点をおいた分析から－，新見公立短期大学紀要，29,199～203（2008）
10）金山時恵，地域看護学領域における「卒業研究」の動向－生活習慣・健康に関する研究から－，新見公立短期大学紀要，29,151～154（2008）
11）古都昌子，看護基礎教育の臨床実習に関する過去５年間の研究タイプの概観，東京女医大看会誌，７（１），33～38（2012）
12）炭谷靖子，原元子，山元恵子，看護研究計画書作成をとおしての学生の成長，共創福祉，７（１），１～９（2012）